

あとがきにかえて

ダーク・グリーン^①の青春 山田正亮の静物

佐谷和彦

今回は「山田正亮初期作品展— Still life 1948-55 —」と題し、静物を主題とする油彩および水彩、ドローイング等60点余を展示し、ご覧いただくのものである。点数が多く、当画廊のスペースでは一度に展示することは無理なので、2部構成とし、第1部1948-52年を3月1日から26日まで第2部1952-55年は3月30日から4月28日まで、とした。

当画廊では1979年以来、毎年、山田正亮展を開催し、この展覧会で16回を数える。朝日新聞社主催のパリ、ベルリンの現代美術交流展を加えると18回を数える。初期作品については、'82年山田正亮1950-80(画廊移転記念)、'89年 Works on Paper 1950-87および'92年山田正亮 1951-91 NICAF: 横浜アートフェアにおいて、その一部を展示したことはあるが、今回のようにその全貌をお見せするのは初めてである。山田正亮は一貫して、平面の絵画のしごとを追究してきたわが国では数少ない作家であるが、その歴史の序章に位置するのがこの静物の作品である。いま、そのすべてをご覧いただけるのをうれしく思っている。

展覧会カタログには作者の山田正亮さんからこの展覧会のために文章をご寄稿いただいた。また、当時の山田さんの貴重なポートレートをカタログに掲載することができた。「若き日の山田正亮:アトリエにて」とでも題すべき、珍しい写真で、勿論、山田さんの髪は真黒でフサフサしている。四十数年前の現実である。

テキストは美術評論家の谷新(たに・あらた)さんから「静物^{ナチュレルモルト}の解体と絵画の組成——山田正亮の1948-1955年——」と題する力のこもった論稿をご寄稿いただいた。おふたかたに深謝申し上げる。

さて、山田正亮の初期作品の静物についてであるが、上記のお二人の文章をお読みいただければ、充分であり、私がさらに屋上屋を重ねる必要はないのであるが、二、三私の感想を申し述べ、あとがきとさせていただきます。

山田正亮の静物画をじいっと眺めていると、さまざまなことが浮び上ってくる。

まず、なぜ静物なのか? という問題である。風景や人物というモチーフもあるのになぜ静物なのか? このところが山田正亮の絵画の出発点であり、その後の山田の絵画の方向をきめている。つまり、構成(コンポジション)が山田正亮にとって最大の関心事でありテーマであることを示している。静物はさまざまに置き換えられ、その自由な組み合わせで、作家自身の主張を表現することができるからだ。最近作の油彩をみてもコンポジション、骨組みの確かさが見どころのひとつであるが、このことは最初期の静物画と通底しているのだ。

つぎに、色彩であるが、静物画はダーク・グリーンで統一されていることを指摘したい。勿論、ダーク・グリーンのほかにさまざま

な色彩が使用されている。茶褐色も眼に入るのであるが、眼をつむると私の網膜にはダーク・グリーンの色調が浮かびあがってくる。このことは私にピカソの青の時代のブルーを思い起こさせる。ピカソの初期、苦闘時代のピカソは、貧乏で、一番安いブルーのチューブを多用したときく。山田正亮は安価なグリーンを多用したのだ。この重いダーク・グリーンはその頃の彼の心を表現している、と思う。さらに敗戦直後の日本の時代を象徴する色彩と言ってよいと思う。なつかしいダーク・グリーン。

敗戦直後の混乱した時代に絵画に取組むことを決意した若者にとって、当然のことながら、絵具も筆もキャンパスも充分に手当することは困難であった。物資は乏しく、暗うづつで、不安な時代であった。山田正亮は健康上の問題もあり、心は苦悩と苦渋に満ち、孤独で不安の日々であったろう。

その救いは絵を画くことしかなかった、と推測する。敢えて言えば「絵画への意志」が山田を支えた、と言ってよい。

コンポジション(骨組み)の確かさが、ダーク・グリーンの画面を支え、静物画が生まれた。今なお、新鮮な美しさを湛える山田正亮の静物画の魅力の秘密は「絵画への意志」がかくされているからだ。

私はこのダーク・グリーンの色彩に作家の情念性を感じる。解体、スクエアー、を経て1960年の多色ストライプに至り、その情念性はピークに達した、と私は思っている。

私が驚きを覚え、またつくづく感心するのは、40年前の作品がこのように沢山、丁寧に保管されている、ということである。作品は作家の分身であるから、自分の作品を大切にするのは当然と言えば当然であろうが、それにしてもこのような完璧さは希有なことではなからうか?

その理由は、間違いなく当時作品が売れなかったからであり、同時に作家自身に、この初期作品に愛着がひときわ強く、安易に手放したくなかったからであろう。そして、私には、作家の自分のしごとに対する自信というものが伝わってくるのである。

山田正亮の作品の管理、整理のよさはよく知られているが、それが最初期から、そうであったとは驚きである。この点、山田正亮はパウル・クレーに似ている。

最後に、山田さんのますますのご健闘を期待するものである。頑張りましょう。

1994年2月1日

山田正亮初期作品展

編集・発行
佐谷画廊
第2朝日ビルディングB.F.
104・東京都中央区銀座4-2-6
tel.03-3564-6733 fax.03-3562-1838

撮影
内田芳孝

MASAAKI YAMADA
Still life: 1948-1955

Edited & Published by
SATANI GALLERY
Daini Asahi Bldg. B.F.
4-2-6 Ginza, Chuo-ku, Tokyo 104, Japan
tel.03-3564-6733 fax.03-3562-1838

Photo by
Yoshitaka Uchida

Copyright by Satani Gallery